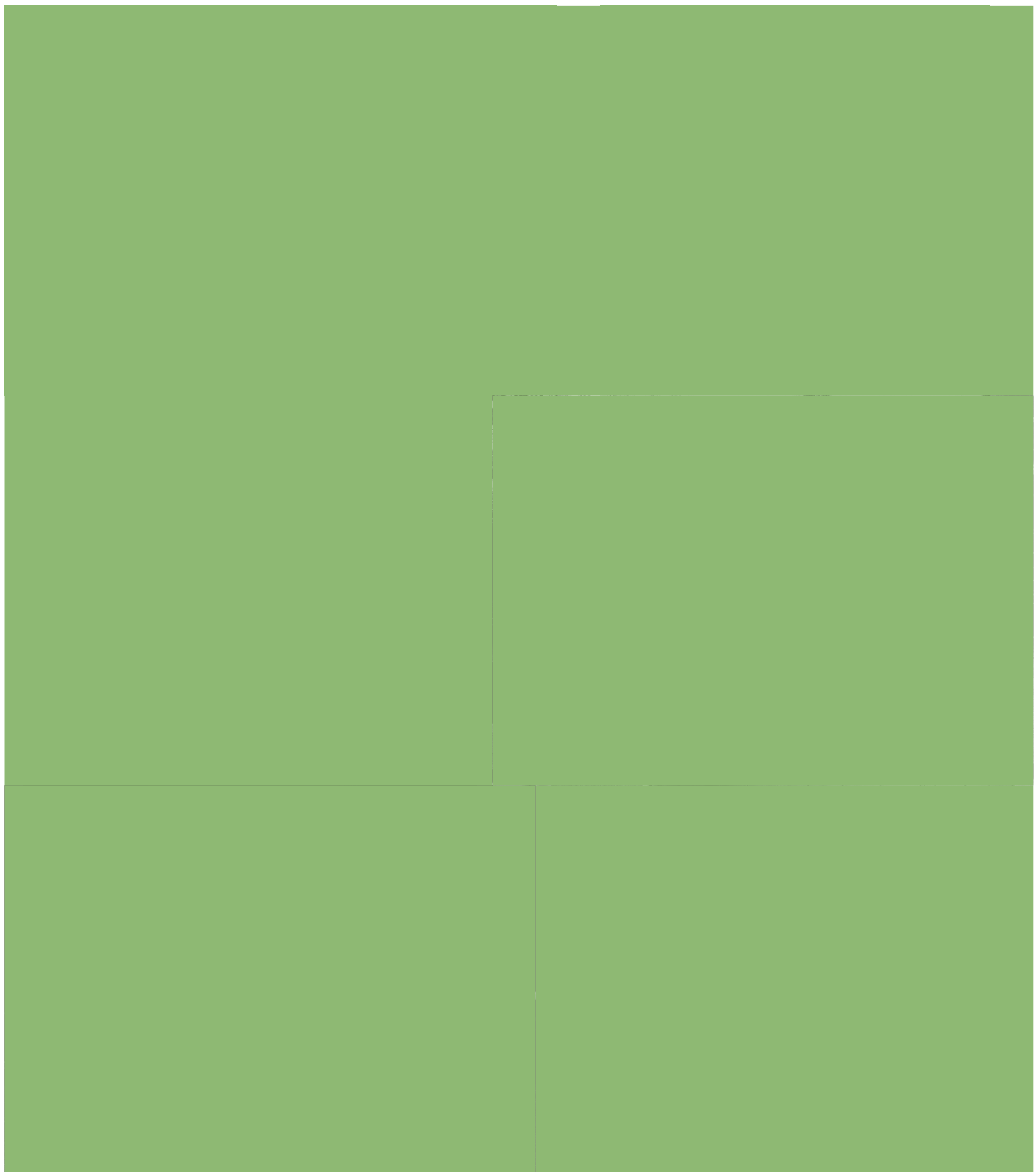


# 民俗文化

第33号 近畿大学民俗学研究所

2021-12



# 民俗文化

第三十三号



番外 荷前



番外 おん祭保存会



## 春日若宮おん祭 お渡り式



第一番 十列児



第一番 梅白杖・祝御幣



第一番 日使、風流傘に続いて、  
緋色の衣冠の陪従がゆく



第一番 馬上の日使と風流傘



第二番

馬上をゆく拝殿八乙女と風流傘



第五番 五色弊、花笠、田楽座



第六番 馬長児と、龍笠を着け、短冊を付けた竹を持つ被者



第十番 野太刀、中太刀、小太刀、長刀、数槍



第十二番 大名行列



# 松の下式

猿楽座



「開口」



「弓矢の立合」



「三笠風流」

田楽座



「中門口の楽」



# お旅所祭



宮司祝詞



神饌



日使拝礼



日使奉弊

## 神楽



「松のいはい」



「宮人」



東遊



細男



神楽式



翁



三番叟

舞楽「賀殿」



和舞



舞楽



「散手」



「蘭陵王」



「抜頭」



「貴徳」



「落蹲」

# 後宴能



「巻絹」



「太刀奪」



「清経」



「車僧」



# 口絵写真解説 渡辺良正の撮った春日若宮おん祭

林 公子

口絵写真ページは、民俗文化研究所に提供された、写真家渡辺良正氏による奈良市春日若宮おん祭の写真から選んだものである。写真はおん祭の行事次第に添って配列した。おん祭のどのようなシーンが撮影されているのかについて、写真の順に従って、若干の解説を加えたい。

春日若宮おん祭は、春日若宮社の創建後の保延二年（一一三六）に始まった。十世紀後半頃に成立した御旅所祭礼、すなわち、「神殿に坐す地域の守護神を神輿に移し、御旅所へ巡幸する」形態の祭礼（福原敏男『祭礼文化史の研究』法政大学出版 一九九五 四頁）で、その成立の背景には御霊会の隆盛があった。神輿の渡御行列には祭礼に参加した專業の芸能者が同行したが、平安京においては渡御行列を見物する人々が出現して、祭礼の風流化を促したとされる。春日若宮おん祭は、当初から、細男、田楽、舞楽、巫女、散楽、一つ物、日の使い、十列、競馬、流鏑馬、相撲などが行われており、風流や芸能が重要な要素であったが、これらを今日のおん祭でも見ることが出来る。おん祭が生きた芸能史などと呼ばれるのはこのためである。

御旅所祭礼であるおん祭のクライマックスは、十二月十六日深更に若宮様がお旅所に遷幸し、十七日深更に還幸するまでの丸一日間である。十七日の正午に始まるお渡り式は、総勢一〇〇〇人へのぼる行例が奈良県庁前広場を出発し、大宮通を西に下り、近鉄奈良駅前を過ぎて南に曲がり、三条通りを東に上って、春日神社一の鳥居をくぐり、影向の松を過ぎてお旅所に入る。お旅所で行われるのがお旅所祭である。神事、神楽に続いて、東遊、田楽、細男、猿

楽、舞楽、和舞、舞楽が行われたのち、闇のなかを若宮様は還幸する。翌日に、奉納相撲と後宴能が行われて、十月に始まるおん祭はすべて終わる。

渡辺良正氏は、日本の祭礼の写真を数多く撮った写真家である。一九三三年生まれ。著書は『日本の祭り・山車と屋台』産経新聞社（一九八〇）のほか多数。谷川健一と『民俗の神』淡交社（一九七五）、『沖繩先島の世界』木耳社（一九七二）を、三隅治雄と『祭りと神々の世界 日本演劇の源流』NHK出版（一九七九）、渡辺伸夫と『椎葉神楽・山の民の祈りと舞い』平河出版社（一九九六）を出版している。提供された写真は、おん祭のうち、お渡り式、お旅所祭、後宴能のものである。撮影時期は特定できなかった。数回のおん祭で撮影されたものだと思う。

現在のおん祭お渡り式の行列次第は、永島福太郎・花山院観忠・三隅治雄・笠置侃一・小島健次郎『祈りの舞 春日若宮おん祭』、サイト「春日若宮おん祭」<https://www.kasugataisha.or.jp/omatsuri/index.html> によれば、次の通りである（適宜、省略した）。

- 番外・稚児 物詣行列 奉賛会長 花傘 自治連合会長 自治連合会
- おん祭保存会長 おん祭保存会 商工会議所会頭 荷前
- 第一番〈日使〉…梅白杖・祝御幣 御幣五本 十列児（騎馬） 日使（騎馬）  
浮流傘 陪従
- 第二番〈神子〉…神子（騎馬） 紙垂傘 拝殿八乙女（騎馬） 風流傘

第三番〈細男・相撲〉…御幣 細男(騎馬) 十番力士行司

第四番〈猿楽〉…猿楽座

第五番〈田楽〉…五色弊 花笠 田楽座

第六番〈馬長児〉…馬長児(騎馬) 被者

第七番〈競馬〉…競馬

第八番〈流鏑馬〉…弓矢持・的持 揚児(騎馬) 射手児(騎馬)

第九番〈将馬〉…将馬

第十番〈野太刀〉…野太刀 中太刀 小太刀 薙刀 数槍

第十一番〈大和士〉…御幣 願主役(騎馬) 馬場役(騎馬) 大和士

第十二番〈大名行列〉…大名行列

写真では、第一番の梅白杖・祝御幣の長い白い千早や、日使の後ろを行く鶴の載った浮流傘がくつきりと捉えられている。第三番、第四番の行列の写真はない。第五番の田楽座では、五色御幣や、二藤の笛役の大きな花笠や、鮮やかな色の狩衣に綾蘭笠の田楽座の衆の姿が印象に残る。第六番の馬長児では、馬で行く稚児だけでなく、その後ろを行く龍を戴いた大きな龍笠を着て、「逢う恋」「忍ぶ恋」などと書かれた短冊をつるした竹をもつ被者がアップで捉えられている。第七番〜九番、十一番は撮られていないが、第十番の野太刀、第十二番の大名行列の挟み箱と毛槍の勇壮な姿が収められている。おん祭のお渡り式は日使に率いられた風流の行列と捉えられているが、写真はおん祭の風流を余すところなく捉えているといえよう。

お渡り式の行列のうち、芸能者は一の鳥居の前の影向の松の前で芸を披露する。これは「松の下式」と呼ばれている。中でも、印象的な田楽座と猿楽座の松の下式の様子が撮影されている。猿楽座の「開口」はワキ方が、「弓矢立合」はシテ方が、「三笠風流」は狂言方が行う。

二時間ほどかけて一行がお旅所に到着すると、お旅所祭が始まる。まずは神職による神事、日使は奉幣と拝礼を行う。続けて、神子による神楽が舞われる。

篝火に火が入り、あたりが暗くなってくる頃、東遊が舞われる。十列児として騎馬でお渡り式に参加した後、お旅所祭では初々しく東遊を舞う。東遊に続いては田楽が行われるのだが、お旅所祭での田楽の写真はない。「刀玉」や「高足」と言った、元来はアクロバットであったものも披露されるのだが、今日では形ばかりになってしまっているせいであろうか。

細男も田楽と共に、おん祭の当初から行われていた芸能である。笛の音とともに、左の袖の舞、右の袖の舞、鼓の舞、両袖の舞、ノットの舞を舞う。

神楽式は猿楽座による簡略版の式三番(翁・三番叟)である。演じ方はおん祭独特で、面を着けず、白一色の装束で、履物を履いて演じられる。「振鉾三節」

夜も次第に深まり、寒さもつってくる頃から舞楽が始まる。「振鉾三節」に続いて平舞が四番舞われるのだが、写真はほとんどない。一方で、舞楽の平舞の後で舞われる「和舞」と、それに続いて演じられる「走り物」という面を着けた舞楽の演目は、躍動的な写真が何枚も撮られている。「落蹲」という二頭の龍が舞う様子を表したと言われる舞楽が終わると、若宮様は警蹕の声に包まれて、闇の中を還幸する。空には無数の星が瞬いている。

翌日は、後宴として、奉納相撲と後宴能が行われるが、後宴能の写真も数多く撮られている。後宴能では敷舞台を敷き、通常の能舞台での上演と同様に演じられる。謡本を広げて見ている見所の様子も、能楽堂での上演と変わらない。こうして、おん祭が終わると、奈良も年の瀬を迎えるのである。



参考文献・ウェブサイト

永島福太郎・花山院観忠・三隅治雄・笠置侃一・小島健次郎

『祈りの舞 春日若宮おん祭』東方出版 一九九一

福原敏男『祭礼文化史の研究』法政大学出版 一九九五

網野善彦・大隅和雄・小沢昭一・服部幸雄・宮田登・山路興造編

『中世の祭礼』大系 日本歴史と芸能 第四卷 平凡社 一九九一

幡鎌一弘・安田次郎『祭礼で読み解く歴史と社会 春日若宮おん祭の九〇〇年』

山川出版社 二〇一六

「春日若宮おん祭」 <https://www.kasugatarisha.or.jp/onnatsuri/index.html>

①	②
③	④
⑤	⑥

表紙

- ① (上段左) 春日若宮神社
- ② (上段右) 春日若宮おん祭 馬上の神子
- ③ (中段左) 春日若宮おん祭 お渡り式行列 第12番 大名行列
- ④ (中段右) 春日若宮おん祭 お旅所祭 白杖御幣
- ⑤ (下段左) 春日若宮おん祭 お旅所祭 細男
- ⑥ (下段右) 春日若宮おん祭 後宴能を待つ人々

撮影はすべて渡辺良正。

表紙

口絵写真 春日大社おん祭

(写真) 渡辺良正  
(解説) 林 公子

目次

近畿の民俗・文化

やまと・まほろば・葺紀行

—奈良盆地南半の鬼瓦からわかること— 第三部

大脇 潔 1

粉河村安養寺離末の問題に関する史料

二〇二〇年度演習ⅠA受講生・

新谷 和之 77

タブ粉の歴史と民俗

—線香粘結剤に関する民俗知・製造・流通—

藤井 弘章 83

和歌山県すさみ町の線香産業

—井瀬家の線香水車を中心に—

山下 桃子 133

北陸の民俗・文化

中世後期における越前北部の軍事情勢と長崎称念寺

新谷 和之 151

娼妓の住み替えをめぐる一考察

——娼妓の手紙から

人見 佐知子

173

**東南アジアの民俗・文化**

トンキンの日本人娼館

——トンキン理事長官府第九号機密書簡をめぐる一試論——

鈴木 伸二

191

ラオスの筈に関する物質文化的研究

——日本民俗学との架橋に向けた一試論——

辻 貴志  
広田 勲

217

**書評と紹介**

野本寛一著『採集民俗論』

辻 貴志

231

大東市所蔵の田舟の調査

網 伸也・月 僧 亮 我・永 田 大 樹  
森 山 達 天 喜・佐 々 木 拓 哉・李 聖 子

258(1)

執筆者紹介

投稿規程

編集後記

259  
262  
263

# 近畿の民俗・文化

## 執筆者紹介（五十音順）

網伸也（あみ のぶや）

一九六三年、大阪府生まれ。近畿大学文芸学部教授、同民俗学研究所所長。  
『平安京造営と古代律令国家』（塙書房、二〇一一年）、『経塚考古学論攷』（共著、岩田書院、二〇一一年）、『仁明朝史の研究―承和転換期とその周辺―』（共著、思文閣出版、二〇一二年）、『シリーズ古代史をひらく 古代の都』（共著、岩波書店、二〇一九年）、『古代寺院史の研究』（共著、思文閣書店、二〇一九年）、など。

大脇潔（おおわき きよし）

一九四七年、名古屋生まれ。フリーランスアルケオロジスト、元近畿大学文芸学部教授、民俗学研究所第三代所長。「みちのく豊紀行―宮城・福島県の被災地を歩いて―」（『民俗文化』二五、二〇一三年）、「七世紀の瓦生産―花組・星組から荒坂組まで―」（『古代』一四二、早稲田大学考古学会、二〇一八年）、「堂内荘厳の考古学―緑釉波紋埴と埴仏から―」（『古代寺院史の研究』共著、思文閣出版、二〇一九年）、など。

月僧亮我（げつそう りょうが）

一九九八年、福井県生まれ。近畿大学総合文化研究科修士課程。

佐々木拓哉（ささき たくや）

一九八五年、兵庫県生まれ。「大東の近代化遺産と戦争遺跡」（『大阪春秋』一六〇号、二〇一五年）、「近世から現代の飯盛城跡の変遷」（『飯盛城跡総合調査報告書』大東市教育委員会・四條畷市教育委員会、二〇二〇年）など。

新谷和之（しんや かずゆき）

一九八五年、和歌山県生まれ。近畿大学文芸学部准教授、同民俗学研究所員。『戦国期六角氏権力と地域社会』（思文閣出版、二〇一八年）、『戦国時代の大名と国衆』（共著、戎光祥出版、二〇一八年）、『近江六角氏』（編著、戎光祥出版、二〇一五年）、「城郭遺構の保存と活用」（『歴史学研究』一〇〇二、二〇二〇年）、など。

鈴木伸二

大阪府に生まれる。近畿大学総合社会学部准教授・同民俗学研究所所員。「中世の開発フロンティア・葛川の民族誌」（『民俗文化』30、二〇一八年）、「生態資源・モノ・場・ヒトを生かす世界」（共著、昭和堂、二〇一八年）、「マングローブ湿地のシンプリフィケーション」（『近畿大学総合社会学部紀要』4（1）二〇一五年）ほか。

辻貴志（つじ たかし）

大阪府生まれ。近畿大学経営学部非常勤講師、佐賀大学大学院農学研究科特定研究員。「スイギュウの「再ドメステイケーション」ーフィリピンのカラバオの乳用化とポリテイカルな力学」卯田宗平編『野生性と人類の論理ーポスト・ドメステイケーションを捉える四つの思考』東京大学出版会（二〇二二）、「ミルクから見る適応と進化ーフィリピンにおける水牛ミルク摂取と乳糖不耐症」稲岡司編『生態人類学は挑む Session 3ー病む・癒やす』京都大学学術出版会（二〇二二）、「Crocodiles in Philippine Folklore. The Southeastern Philippines Journal of Research and Development 26 (1) (二〇二二)」、ほか。

永田大樹（ながた だいき）

一九九七年、京都府生まれ。近畿大学総合文化研究科修士課程。

林公子（はやし きみこ）

一九五七年、大阪府生まれ。近畿大学文芸学部教授。『歌舞伎をめぐる環境考』（晃洋書房 二〇一三年）、『歌舞伎大事典』（共著、柏書房 二〇一二年）、『馬琴の戯子名所図会をよむ』（共著、和泉書院 二〇〇一年）など。

人見佐知子（ひとみ さちこ）

兵庫県生まれ。近畿大学文芸学部教員、同民俗学研究所所員。『近代公娼制度の社会史的研究』（日本経済評論社、二〇一五年）、『第4次現代歴史学の成果と課題3 歴史実践の現在』（共著、績文堂出版、二〇一七年）、『戦争の子ども』からオーラル・ヒストリーを考える』（『日本オーラル・ヒストリー研究』一四、二〇一八年）など。

広田勲（ひろた いさお）

東京都生まれ。岐阜大学応用生物科学部助教。Characteristics and Roles of Fallow and Riparian Forests in a Mountainous Region of Northern Laos. In: Cairns, M. F. eds. *Shifting Cultivation and Environmental Change*. Earthscan (二〇一五) Local Records of Long-Term Dynamics of Bamboo Gregarious Flowering in Northern Laos and Regional Synchronicity of *Dendrocalamus membranaceus* in Two Flowering Sites. *Journal of Mountain Science* 14 (6) (二〇一七)、「ラオス北部焼畑民のタケ利用ー少数民族カムのワナとタケ」『富士竹類植物園報告』五四（二〇一〇）、ほか。

藤井弘章（ふじい ひろあき）

一九六九年、和歌山市生まれ。近畿大学文芸学部教授、同民俗学研究所所員。『高野町史 民俗編』（共著、高野町、二〇一二年）、「高野山納骨習俗の地域差ー和歌山県北部を中心に」（『民俗文化』二九、二〇一七年）、『日本の食文化 4 魚と肉』（編著、吉川弘文館、二〇一九年）、『三和インセクティサイド 50年のあゆみ』（編著、三和インセクティサイド、二〇一九年）、「和歌山県における櫛の民俗ー紀美野町の栽培・採取を中心に」『民俗文化』三二（二〇一九年）、など。

森山達天喜（もりやま たつあき）

一九九七年、大阪府生まれ。近畿大学総合文化研究科修士課程。

山下桃子（やました ももこ）

一九八三年、和歌山県生まれ。和歌山県職員（林業職）。緑化推進や森林教育などの業務を通じてSDGsの普及に取り組んでいる。『たまぐす草紙』（すさみ線香水車たまぐすの会、二〇二一年）など。

李聖子（り せいこ）

一九八二年、大阪府生まれ。大東市・産業文化部生涯学習課学芸員。『飯盛城跡総合調査報告書』（共著、大東市教育委員会・四條畷市教育委員会、二〇二〇年）など。

渡辺良正（わたなべ よしまさ）

一九三三年、福岡県生まれ。民俗写真家。『沖縄先島の世界』（木耳社、一九七二年）、『日本の祭り 山車と屋台』（サンケイ新聞社、一九八〇年）、『椎葉神楽』（平河出版社、一九九六年）、など。



## 民俗文化 投稿規程 (令和三年十二月)

- 一、投稿できる者は、近畿大学民俗学研究所々員および同所員より推薦を受けた者とする。
- 二、受け付けた原稿は複数の査読者による査読を受ける。その結果にもとづき、掲載の可否を決定する。論部の内容に不備がある場合には、編集委員から投稿者に修正を求める。
- 三、刷り上がりは、A四判・縦書き(必要な場合は横書きも可)、一ページあたり三十五字×十九行×二段を原則とする。原稿執筆にあたっては、できる限り、刷り上がりに合わせて字数設定を行うものとする。
- 四、投稿の締切日は、毎年五月末日とする。原稿は、原則として、電子記憶媒体(CD等)を添えて編集委員に提出する。
- 五、別刷は五十部を無料とする。
- 六、刊行後の報文(論文、研究ノート、書評、写真及び写真解説等)は、その著作権が近畿大学民俗学研究所に帰属する。ただし、著作者本人による転載等をさまたげるものではない。
- 七、刊行後の報文(論文、研究ノート、書評、写真及び写真解説等)は、冊子体以外の媒体(近畿大学学術情報リポジトリ等)で公開されることを承諾のうえ投稿すること。ただし、電子媒体での公開に際しては、著作者本人もしくは話者の意向等により、一部または全部を非公開とすることがある。

近畿大学民俗学研究所

## 編集後記

令和三年（二〇二一）も昨年を引き続き、コロナウイルス感染症が収束せず、大学の授業はオンライン授業を中心に、対面授業を組み込む形で進められてきた。感染拡大にともなう授業形態が変更され、教員はその対応に追われることになり、研究所の活動も地域への配慮などのため昨年に引き続き予定通りには進まなかった。

このような状況のなかでも、本誌には所員、元所員の論考、史料紹介のほか、多数の論考を寄稿いただき、充実した内容とすることができた。口絵写真として民俗写真家の渡辺良正氏が撮影した春日大社のおん祭の写真を掲載させていただき、芸能史を専門とする林公子氏に解説いただいた。このほか、ラオスの漁具に関する論考、和歌山県の線香水車に関する論考なども寄稿いただいた。和歌山県の線香水車に関する論考は、水車経営者の子孫が執筆したもので、親族のなかで伝承されているものを中心にまとめており、大変貴重な事例紹介となっている。また、大東市の田舟に関する論考は、大東市産業・文化部生涯学習課文化財グループと共同で調査した成果である。大東市と民俗学研究所は、今年度、あらたに連携協定を結ぶことになり、今後も継続して大東市の民俗・民具調査を実施していく計画を立てている。

なお、近畿大学遺跡学術調査団で長年にわたり遺跡の調査を担当していただいていた藤田義成さんが、令和三年七月三〇日にお亡くなりになった。本学本部キャンパスには小若江遺跡や山賀遺跡など、考古学的に重要な遺跡が所在しており、藤田さんはそれらの遺跡の調査に従事し整理作業を進めてこられた。また、文芸学部では構内遺跡の紹介などを精力的におこない、多くの専攻学生がお世話になってきた。ここに藤田さんの長年の功績に対してあらためて

感謝を申し上げるとともに、民俗学研究所として哀悼の意を表したい。合掌。

(H・F、N・A)

---

民 俗 文 化 第 33 号

令和 3 年 12 月 20 日印刷  
令和 3 年 12 月 20 日発行

編集・発行者 近畿大学民俗学研究所

〒577-8502  
東大阪市小若江3丁目4番1号  
電 話 (06) 6721-2332

印 刷 所 近畿大学 管理部 用度課

---



近畿大学

KINDAI UNIVERSITY